

「茶道と経営」

田中仙堂氏

(大日本茶道学会会長)

茶道と経営は、かけ離れたものではないことを、三つの切り口からお話します。

第一の切り口の「歴史」からみると、大陸で飲料として発達した茶を、それぞれの時代の喫茶方法の最新形態を導入してのちのイノベーションの連続ということが指摘できる。平安時代に唐代・煎茶法を、鎌倉時代に宋代・点茶法を、江戸時代に明代・淹茶法を導入し、現代の茶道に通ずるのは、宋代・点茶法なので、それにかぎっても、室町時代の武家が、公家に対抗できる自分たちの強みが発揮できる文化として、唐物を飾って喫茶を尊重してからも、イノベーションが連続している。戦国時代に日本を訪れた宣教師は、日本独自の茶のあり方として、「客人がどんな階層や身分の高い人であっても、人がどんな階層や身分の高い人であっても、たとえ天下殿であろうとそれでもてなしをする。」(『日本教会史』)点を指摘している。身分階層を越えた交流の手段として喫茶を利用した茶会は、三好政権下で成立したものと考えられるが、その後、信長は、茶会をメディアとして発見、秀吉は、茶会をメディアとして利用しつつ、さらにその利用(「禁中茶会」、「北野大茶湯」)によって、茶を享受する階層を広げた。江戸時代には、喫茶は、身分階層を超えた交流の手段として利用されると同時に、信長・秀吉が茶席を主催した伝統を引き継ぎ、二代秀忠、三代家光と自ら茶会を主催し、四代家綱の時代に数寄奉行が組織されることによって、大名庭園の文化を生み出すことになる。幕藩体制が崩壊した後は、殿様から数寄者(元勲・産業人など、茶道を生業としない茶道愛好者を専門の茶人と区別するための名称)に担い手は代わってくる。近代数寄者たちの茶会は、財閥の系統を越えた交際の機会を提供したことが実証されている。彼らが愛好した道具は、現在では、数寄者が創立した私立美術館に残されることになった。近代の数寄者の時代を終わらせたものは、戦後の税制改革で、財産税は、華族だけではなく、数寄者にも打撃与えた。茶道の内実が、経営者を茶道から遠ざけたのではなく、外的な要因であったことは、次の二つの切り口からも明らかになる。

第二の切り口「マネジメント」からみれば、茶会を運営することはまさに、飲食物を提供する等のリスクを管理すること、自分の心身を整えていくこと(セルフ)、そして、茶会に関わる多くの人々の協同作業を実現すること(チーム)のマネジメントに他ならない。

第三の切り口「習い事で名前を持つこと」として、呪術的、宗教的、封建制度下の意味の他に、現代的意味としては、もう一人の自分となって、自分を客観視する機会を与えてくれることを指摘した。さらに、習い事の中での茶道の特徴としては、身体性・社交性・広範囲の文化性があり、茶人としての名前をもって活動することは、ゼネラリストとして、対人関係を含めた感性を磨くことにつながる点で、経営の世界に近いのではないだろうか?現代では、社会的な成功を確認するために高価な茶道具を買いあさって見せびらかすという行為が、難しくなった分、茶道は、日本文化に親しみ人間的な実質を磨く場として、近づきやすくなっているということはいえないだろうか。